
世界って広いんだね

椰代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界って広いんだね

【Nコード】

N0686Z

【作者名】

椰代

【あらすじ】

女子高校生なうゝなあたし、ひやま 桧山 あお 蒼は模試の当日に寢坊。前日の夜中に「寢坊したら奢ってね」と弟の空に言われていたのに（略）。気持ちを切り替えて車内勉強するあたしに襲いかかってきたのは睡魔、という名のプロローグでした。

考えていたものよりかなり脱線しました。弟設定を入れたことによって、

予想外ゝなことに話がうんたらしそうなので、一応R15出して

おきます。

1章＊登場人物（前書き）

あんまり設定気にしないほうがいいかもしれません（）

1章*登場人物

*主人公：ひやま 桧山 蒼 あお 17歳。女子高生。 + @ボフ黒髪、黒目

・学校では美人のギタリストで人気者

・勉強よりも、放課後のバンド活動やバイトが好き

・朝は低血圧で機嫌が悪い

・恋人は作らない主義（理由有）

*弟：ひやま 桧山 空 そら 16歳。高校生。

・学校内でイケメンと噂的。本人興味なし

・成績優秀、推薦入学で学校期待の星

・朝から爽やかに登校できる

・恋人は作らない（隠れシスコン）

+ @家族構成：サラリーマン 父母（専業主婦）主人公・弟

*案内役：（後に）銀

・森の案内をしてくれる

・トリップ先ではパートナー

*青年：（後に）空

・送られる世界の神様

1章＊登場人物（後書き）

たぶん章の区切りごとに登場人物を入れます

あたしの560円(前書き)

この小説に興味を持っただけでありがとう。
嬉しいです。異世界トリップって魅力的ですよね！
よろしく願います

あたしの560円

「蒼^{あお}っ！！起きなさい！！遅刻するわよ！！」

ある秋晴れの朝。

あたしはいつもどおり母に布団をはぐられ、自分の温もりから引き離された。

「いつまで寝てるの！！早く立つ！！起きるっ！顔洗う！！」

ああ・・・うるさい。低血圧のあたしの頭には母さんの甲高い声に顔を思いつきりしかめた。

言い返そうとしてふとデジタル時計を見、次の瞬間母さんが顔をしかめた。

「は、8時？！」

「だからさつきから言ってるじゃない！遅刻するのよ貴方！急ぎなさいね」

と言つて、ぱたぱたと部屋を出て行った。

・・・やばい。今日は朝から模試なのに。あたしは頭をフル回転させた。

テストは9時から。学校まで30分。テスト15分前に着席完了。だから準備時間、10分以内。

考えながら制服に腕を通しスカートのホックを留めてかばんを抱えて家を飛び出した。

駅のホームまで猛ダッシュしたが、行ってしまったばかりなのか。

エントランスの最前列に並べた。ケータイで時間を確認すると、予想より一本早い電車に乗ることができるようだ。

よかった、遅刻はなんとか免れそう。まだ寝癖が収まりきっていない髪の毛をしばらく撫で付けながら思っていると、電車の到着するときのメロディーが流れた。

扉が開いて、乗客が雪崩のように降車する。あたしが乗車する頃には、珍しく乗車シートに座れた。

ああ、間に合ってよかった。今日は（寝坊して）ついてないけど、（遅刻免れるから）ついてる。

何気なくケータイを開くと新着メールがあつた。弟から。

『寝坊 乙b

あと俺、購買のパンセット（560円）ね？』

「・・・」

そう言えば昨日、というか今日の夜中に「蒼いつまで起きてんの？また明日たたき起こされんぞ」と寝坊ゼロの弟にニヤ顔で言われたので「そんなことする訳ないじゃん」と反論して、「じゃあ賭けようか。蒼、寝坊したら奢れよ」と言われ「じゃああたしパンセット（560円）ね」と乗ってしまったんだ。・・・なんてこった。あたしの買い食い費が弟に・・・

とりあえず電車独特の走行音を聞きながら学校最寄駅に着くまでの間、かばんから英単語帳を出して、テスト対策に集中することにした。だがしかし。数十分前まで寝ていたにも関わらず眠い。何故かとにかく眠い。頭を軽く振りなんとか紛らわそうと瞬きもする。でも眠い。

馴れないことするもんじゃないなあ〜どうせ終点だし、寝てしまおう。

潔く折れたあたしは、単語帳を閉まってかばんに顔を埋めた。

あたしを呼ぶ声（前書き）

あたしを呼ぶ声

心地よい風があたしの体を撫ぜる。自分の体が湿った土の上に横たわっている感覚。

あれ・・・？あたしは電車のシートで寝てるんだよね。何故に土・・・？

くわつと目を開けば。

「・・・・。どこじゃらい」

あたしの知らない森。そしてあたしは土の上。

自分、こんな場所で何してるんでしょう。何で森！電車どこ！模試はどうする！パンセツト売り切る！！てかどこだここ、もうやだ現実逃避したい。

「・・・・。とりあえず誰かに連絡しよう」

それから2時間ほどだと思ふ。あたしは気づかされた。持っていたはずのケータイはかばんを探しても制服を探しても、どこにもないことに。

連絡手段はなし、と・・・

そこであの岩場に留まっているよりも、自分の勘を信じて現地の人を探すことにした。

日本でいう春の午後3時くらい、だろうか。森は太陽の陽気を

十分に蓄えているせいかぽかぽかとして暖かい。きらきらとした木漏れ日に癒されながら歩き続けた。

けれどもあたしは女子高生。馴れない森を歩き続けるスタミナは限られている。時間は待つてくれない。気がつけば太陽はゆっくり傾いてきていた。肌で感じる風も冷たい。もうかなり歩いたはずなのに人も、鳥も見当たらない。太陽は沈む手前。

どうして誰もいないのか。急に大きな不安と寂しさかが押し寄せてきた。

「・・・っ」

あたしの体は長時間馴れない森を歩き続けた疲れからか、細い木の根に足を引っ掛けて少しひざをすりむいてしまった。立ち上がって、汚れを落す気にもなれなくて。その場にしゃがみこみうずくまった。さつきとは違った、夜の風があたしの体温を奪っていく。

” 蒼 ”

誰かが自分を呼んだような気がしたのと同時に、家に着いたときのような、安心感が体を包み込んだ。あたしが顔を上げると、

「……。」

目の前に狼に似た真つ白の動物がじつとあたしを見つめていたの
で驚いた。

”蒼”

また、聴こえた。さっきと同じ声だ。耳から入ってくる声でなく、
頭に直接響く弟に似た声。

あたしは試しに、どうすれば帰れる、と単刀直入に問いかけた。

”……目の前の彼について行けばいい”

間を置いて声の主から返事があった。

わかりました、と返事をし、次いで目の前の白い狼と目を合わせる。

狼はあたしの目を見るとぱちつと瞬きをしてから、くるりと背を
向けて歩き出した。

悪い感じはこれっぽちも感じない。あたしは迷わずその背中につ
いていった。

あたしを呼ぶ声（後書き）

ありがとうございました。

よければ感想、聞かせてください（^ ^）

声の主は予想外（前書き）

私も予想外です。

声の主は予想外

辺りはすっかり暗く静まり返っている。でも、白い狼を見失ってしまうことは1度もなかった。

ところでこの案内役、狼って言うっちゃっていいんだろうか。それはもう真っ白なすんばらしいキューティクルの毛並み。馬くらいの大きさで、ふっさふさのしっぽが何故か2本。

うん、わかりやすく例えるとジ　リのヤマイ又さん。実は彼も山の主だったりして。

歩くたびに揺れるしっぽを見てみると、心が和む。でも、しっぽが2本もある大きい狼なんて、DVDでしか見たことがない。いるはずもない。今思い返せば、今から会う声の主も謎だ。そもそもあたしはいつテレパシー能力に目覚めたんでしょう。顔も知らない誰かと普通に会話しちゃったけどさ。

「・・・。」

そこまで行き着いてあたしは考えるのを止めた。だって今から会える声の主は、きっとあたしのことを知ってる。あたしが電車に乗っていて、こんな状況になっちゃったミステリーも知ってる。というか、もしかすると関係者かもしれない。何はともあれ会ったら全部聞き出そう。

しばらくして、森がひらけて大きな湖が見えてきた。月は出てい

ない。星が、輝いている。あたしには大地が煌めいて見えた。なんて神秘的なんだろう。足を運ぶのも忘れてあたしは立ち尽くした。

案内役の彼は湖の傍まで行って、後ろのあたしに向き直った。じつとこちらを見つめてくる。

こっちだよと言われたような気がしたから、あたしも彼の隣まで歩み寄った。

「うわぁ・・・！　綺麗・・・！！」

宝石がちりばめられた水面を覗き込むようにしてかがむと。

「蒼。待っていたよ」

「えっ！？わっ・・・と！」

突然傍で生身の声がしたので驚いて体勢を崩してしまった。

湖に落ちる！と目を瞑ったけど、ぐいつと強い力で引き上げられる。

「いやあ、危ない危ない」

苦笑が混じった声の主の声。あたしが恐る恐る顔を上げると。

「・・・（う、わあ、綺麗）」

動揺で声がでなかった。若い青年だ。弟に似ている、ような気がする。でもあたしが一番目を惹かれたのは翡翠色の目。日本人をやつてるあたしにはもちろん縁がない色で。そもそも外国人で翡翠色の目の人なんているんだろうか。

いやいや。見惚れてる場合じゃないよ自分。この人には聞きたいことがたくさんあるんだから。

「ということで、ここ何処ですか？あたしを地球、日本に返してください」

と目を見て単刀直入に聞いた。大丈夫。この人には全部わかってる。たぶんだけど。今は初めてのアローンサバイバルで極度のホームシックなんだ。言葉足らずは堪忍してください。後はもう今すぐ家に帰りたいです。

声の主はというと、あたしと目が合った数秒間、目を見開いて硬直していた。そして次の瞬間、くすりと声を出して笑った。

「・・・何がおかしいんですか」

疲れていて早く返りたいあたしは声の主を睨んだ。

「ここが君のいた世界じゃないってことはもうわかってるんだね。悪いが蒼を元の世界には返せない。蒼、君は元の世界では他界しているんだよ」

「え・・・？」

「君は朝、寝坊して遅刻しそうになって電車に乗った。その電車が事故に遭ったんだ」

「・・・」

「・・・。おいで。見てご覧」

青年は湖に近寄って、水面に片手をかざした。すると水面に家族が映る。父さん、母さん、友人達。皆が喪服を着て順番に手を合わせていた。弟は見当たらなかった。そして祭壇の上には、あたしの笑う写真。

「君は本来、命の流れにしたがって他の命たちと魂の川を廻る筈だったんだけどね・・・」

俺がたまたま見つけたんだよ。だから捕まえて連れてきたんだ。

「

「・・・どういうこと？」

青年の説明曰く、命は廻り、ある一定の周期がやってくると、どこかの世界に根付くらしい。

そしてあたしはあの電車で死んだ後その周期に乗って廻り始めるところを、この人に捕獲された、らしい。まさか自分が他界しているってというのは予想外。この人に連れてこられたっていうのも予想外。

もうどうでもいい。全てが予想外なんだもん。

「ところで蒼、今度はこっちの世界で生きてみる気はない？」

青年は真剣な目であたしに尋ねた。何かあるのかと思ってあたしも真剣に返した。

「・・・あたしに何か役目があるんですか？」

「え？役目なんてないよ。俺のわがままだし」

「・・・え？」

さらっと言った。今この人さらっと言ったよ！わがままって！わがままって何！！

動揺が顔に出たのか否か、青年は宥めるようにこう続けた。

「ははっここは俺の世界なんだよ。蒼に行って欲しい世界ってここじゃなくて、

俺が神様の世界のこと」

「・・・待て待て待て。あんたが神さま？」

弟に似ている分、信じらんねえですよあたしは。何か怖いんだけど。

あたしの動揺に対して青年は笑顔で答える。この笑みは、

「いやだなあ蒼。行けばわかるよ行けば。そう、行ってみなくちゃわからない」

態度がコロコロ変わる青年の顔はもはや神と思えず。弟の外国人
バージョンに見えてしまう。

うん、青年のそれは、弟のシニカルな空にそっくりで。

「君は俺の波長とすごく相性がいいんだよ。これも何かの縁と思
つてさ」

青年は呆然とするあたしを見て、面白いのか何なのか。とにかく
笑いが止まらないらしい。ツボに入ると中々抜け出せないところも
そっくりである。ますます弟に見える。

「ふ・・・あはははっ！ダメだもう俺もう説明無理」とりあえ
ず俺の世界に送ってあげるね？

心配しないで。ちゃんが必要な知識は行く前に伝えるからね。

ああ・・・嫌なんて言わせないよ。俺と相性の合う魂なんても
う随分巡り会ってないんだから」

拒否権ナシってか。しかも後半から青年の言葉は急に声色が下が
った。それに目がなんていうか・・・獣・・・？身の危険を感じ
て後ずさるには遅かった。

「・・・！！」

はっと気づいたときには腕を引き寄せられ、腰に手を回され、顎
先をつかまれ顔を持ち上げられていた。・・・何この恋人的状況。
顔が弟と似てるせいか全然ときめかないんだけど。

「はあ、鈍いなあ、ちゃんと警戒してよね。・・・蒼姉さん？」

「え?! つて空?! な・・・んっ」

確認する前に唇を重ねられてしまった。

そこから何か、大きな力のようなものと、空が神であろう国に関するであろう歴史、知識、全てが鮮やかに流れ込んできた。あたしは青年から伝わるそれに驚いて、手で押し返そうとしたが、やんわりと止められた。そして大量の情報に頭痛がしてきた。

あたしは、意識を手放した。

声の主は予想外（後書き）

どうしようもなく予想外に・・・！！

送られたというか落された。
(前書き)

蒼は犬が好きです

送られたというか落された。

あの青年に初めての口付けという形で世界に関わる情報を得たあたり。

まだ夢のようなふわふわとした感覚の中。あたしはその情報を大方にまとめるところだ。

まずキスしてきた変態兼青年。あれは日本で生きていた弟の魂の半分らしい。

何で半分かなんて突っ込まない。頭に入ってきた情報はややこしくて、思考回路単純なあたしには説明できません。とにかく弟だと言われたので空と呼んでいいか、と尋ね了承されたのでよし。弟にキスされたのかという危ない線もノーカウントでいこう。口付け以上の線は超えてないもん。

次に森で案内役をしてくれた彼（大きなおおかみもどき）。あたしと一緒に送られるらしい。空曰くイイパートナーになってくれるだろうから、名前も付けてやって、だって。うんわかったよ。ぴったりの名前考えるね。

そしてあたしが送られる世界。5つの大きな国で成り立っていて、東に水の国、西に風の国、南に火の国、北に地の国。そして中央に天座。^{あまざひ}あとは日本でもよくあった某ファンタジーに似ている。ギルドが存在し、モンスターもどきが居て、魔法が存在する。

その他、かくかくしかじか。そこら辺はレッツ経験、だそうです。そして最後に

”いつも見守ってるよ、蒼。”

そんな言葉を残され、あたしの意識はそこで背中に衝撃を感じることで遮断された。

「いつ！たーい・・・」

あたしは柔道で背負い投げされたような痛み（されたことないけど）に顔をしかめながら体を起こした。見渡せば周りとはとにかく白教会のような細工の石造りの壁、柱、祭壇。いくつかある小さめの高い天井窓から光が差し込んでいる。ここは天座に存在している神殿だ。そして祭壇の上にはまさかの巨大な弟像。しかもありえないほど白いエンジェルスマイル。

”いつも見守っているよ、蒼” ふと、空の最後の言葉が頭をよぎる。

空の言葉を思い出し、お前はどこぞのシスコンかと眉間にシワを寄せていたところ、ふしゅんつと鼻息を横からかけられた。振り向くと案内役の彼がじっと見つめている。

「ご、ごめんごめん！空の白い笑顔、小さいころ以来見たことなかったからさ・・・」

思わず本音が出てしまっただけ言葉につまる。彼はじっと聞き入って、

あたしを見つめたまま。そこでふと思い出す。名前、あげるんだっ
た。

「・・・」

「・・・」

しばらく無言でお互いを見つめ合う。あたしは目の前の彼をじつ
と観察して気づいた。彼の毛並みは神殿の白に属していない。彼の
白はもっとこう、なんというか・・・

「銀・・・？」

に近い気がする。彼の耳がくいくいつと動き、ふあさり、2本の
しっぽが揺れたので、

「銀」

はつきりと呼べば。彼は近寄って頭を摺り寄せてきた。さらさら
した毛並みとじんわりくる温もりに自分の頬が緩むのを感じた。

「銀、あったかいね」

立ち上がって銀の首に手を回し、ぬくもりを確かめるように、顔
を埋めると安心感に包まれた。

しばらくそうしていると、銀がぴくりと反応し扉を警戒し始めた。
何かと思い耳を澄ませば慌てたような複数の足音、話し声が近づい
て来る。あたしは顔を上げて隠れられるような場所は無いか探した

けど、ここは神殿。見晴らしがよすぎる。あたしはまだしも銀も隠れられそうな場所は見当たらない。

あたしは頭をフル回転させ対応を考えた。

相手は味方じゃないからあたしは何をされるかわからない。ここは隠れる場所なし。扉は一つ。とすれば、できることも一つ。

「銀。逃げるよ」

あたしの考えを察してくれた銀は、あたしを背に寄せ、祭壇のほうへ移動し、扉に向かって身構える。ばたばたと足音は近づいてきて、扉が一瞬光った瞬間。

「今だ」

あたしの合図と同時に、銀は扉に向かって駆け出した。

送られたというか落された。
(後書き)

走れ銀

出会い

銀が駆け出した瞬間、あたしたち目掛けて黄色く光る鎖が伸びてきて、巻きつこうとする。あたしはぎゅっと目を瞑り、銀は鎖を避けようと地を蹴った。しかし次の瞬間。

「逃がさん!!」

声がしたと思った瞬間、あたしと銀は別々に鎖に巻きつかれ、引き剥がされ、硬い床に叩きつけられた。あたしは呻きながら銀の様子を見ようと上半身を起こそうとすると、鎖からビリビリッと電気のようなものが体を流れた。

「ったあ!何これ・・・」

痛みに耐えながら銀を探すと、少しはなれたところに銀も同じように捕まって・・・いなかった。

彼は数人の魔術師っぽい方々相手に、唸って威嚇している。銀、強い!と感心していると、いきなり後ろから抱え上げられ、立たされ、背中から引き寄せられ。後ろから抱きつかれる状態になっている。

「動けば命はない」

耳の傍で囁かれた。声の低さ、背中に感じる硬い胸板から男だとわかる。動かないでいると、男が再び口を開いた。

「鎮まれ！！この女がどうなってもいいのか！！」

「！　グルウウウウ・・・ガッ！！」

銀はあたしが捕まっていると解った途端、なんと魔術師っぽい人
たちをあつという間に飛び越え、こちらに突進してきた。目がマジ
で怒っている。男は止まらない銀に舌打ちして、片方の手を前に出
し、呟いた。

「天の盾よ」

すると手のひらから水の波紋のように淡い波のようなものが、ド
ーム状に男とあたしの周りになされた。銀はそれにぶつかると手前で
なんとか立ち止まるが、男に対しての威嚇は止まらない。

「ふむ。魔術師共、手を出すな。そのまま置いてくれよ・・・さ
て女、嘘はつくな。」

何故ここに、何の目的で、どうやって入った」

男とあたしの姿勢は抱えあげられた時から変わっていない。つま
り、あたしと男は威嚇している銀のほうを見ながら、あたしは後ろ
から男に抱かれているままである。2人とも銀のほうに向いた奇妙
な体制のまま会話は続けられた。

「・・・知らないです。意味も、目的も、方法も」

だつていきなり送られたからね？拒否権ナシで。まさか初っ端か
ら捕まって悪者扱いされるなんて思わなかったよ。空のやつ、覚え
てろよ。

「・・・」

男は無言であたしの肩をつかみ振り向かせた。あたしと男は向かい合わせだ。

「・・・」

「・・・」

男の目は、あたしの目捉えた瞬間、見開かれて動かなくなったので、危害はないことを伝えようと思う。先手必勝。

「あたしたちは敵じゃないです」

男の目をまっすぐ見て言う。嘘じゃないんです、解ってくださいと目力を込めて。

目の前の男はあたしの声に我に返り、驚いたように何度か瞬きをして

「信じよう」

と言ってくれた。よかった。これで牢屋行きはないだろう。変な拷問なんかもなさそうだ。あたしはほんと溜め息について、銀を振り返って微笑んだ。

「銀、だいじょうぶだよ」

銀はそれまで男を睨んでいたが、あたしがだいじょうぶと言つとその警戒を少し解いた。

それを確認して、あたしは再び男に向き直った。

「信じてくださってありがとうございます。あたし蒼っています」

「・・・ディールだ。天座の長をしている」

ええ、知ってますよ。空から情報は貰ってますから。

「・・・ディールさま」

周りの魔術師達がおずおず申し出た。

「わかっている。アオ、敵ではないと信じるが、
お前は私の張った結界にやすやすと入り込んだ。どういうことか解るな？」

「・・・はい」

いや、わかりたくありませんけどね。

見逃してはもらえない

あれから魔術師は残ってその場の処理に、あたしと銀はディールの書斎に転送された。

いろんなジャンルの本がところ狭しと棚に並んでいる。立ち尽くしているとかの机の前にある長ソファに座れと促されたので素直に座った。銀は後ろに座ってじっとディールを見つめている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

彼はあたしたちを探るように見つめたまま口を開く様子を見せない。あたしは切り出し方がわからないので黙っている。銀はゆっくりと瞬きを繰り返しながらディールを見つめている。

「・・・もう一度聞こう。アオ、何処から来た」

あたしは全て話すべきか否か迷った。

ディールは敵ではないと信じてくれたけど、あたしの味方ときまつたわけじゃない。本当のことを話すのはためらわれた。でも敵じゃないと信じてくれた彼に嘘はつきたくなかった。

「・・・今は話せません」

「・・・ふむ」

彼は見つめていた目を少し伏せて考えるそぶりをみせ、もう一度私を見た。そして

「・・・アオの気は変わった色をしている」
オーラ

ぼそりと呟いた。

「気」とは簡単に言うところの世界で誰もが生まれながらに持っている、素質のようなもので、大きく5つに分かれている。天・火・水・地・風という属性があり、それは住んでいる土地の力の影響で現れる。

「・・・知っているだろうが気は我々が生まれ育つ土地の影響で身につく力だ」

天は中央に位置する都。そこで生まれ育つたものは天の気に大きく影響されている。

天の右、東は水の都。同様にして水の気に大きく影響されている。
天の左、西は風の都。同様にして風の気に大きく影響されている。
天の上、北は地の都。同様にして地の気に大きく影響されている。
天の下、南は火の都。同様にして火の気に大きく影響されている。

気の色も属性によって異なり、天は黄、火は赤、水は青、風は白、地は橙。

デイルは天の気だろう。彼が使った鎖は黄色に光っていたから。力の内容は気の種類でだいたい想像できる。

「アオの気はどの属性だろうな。俺は生まれてからその色にお目

にかかったことがない」

「・・・」

そう、あたしの気の色はどの属性にも属さない緑色だ。ちなみに何の気かという命の気。

これは生命力の力そのもので、この世界の神様である空の気だ。もちろん彼には話さない。とりあえず黙っておこう。

「さて・・・俺の結界を割って入った件だが。あれを破いて中に入ったのはアオが初めてでな」

話題が変わり、ディールの顔つきが変わった。口角が上がり綺麗な弧を描いている。しかし目が怖い。切れ長の翡翠色の目がどこか楽しげにあたしを見ている、ような気がする。

たぶんあたしの顔は今かなり引きつっているだろう。

「・・・そうなんですか」

「ああ、そうだ。あそこは神聖な場所で普通立ち入り禁止だ。アオは不法侵入したことになる。」

さて・・・どうしようかな？」

「・・・」

につこりと問われ、あたしは顔がさらに引きつるのを感じた。

話が進まない

ディールの笑顔は上に立つものの特有の迫力、そして美形というオプシヨンがついているためとにかくいろんな意味での迫力がすごい。

今思い知らされている。あたしはとにかく、本当にごめんなさい、何も知らないんですと懸命に弁解していた。

「そのくらいにしなさい、ディール」

ふいに知らない声が降ってきたので驚いて振り向くと人が立っていた。

第一印象、青。肩まである髪も優しげな眼差しも透き通るような青い色をしている。そしてその人と目が合った瞬間、あたしは水の中に居るような錯覚に襲われた。

呼吸を忘れ、しばらく動けないでいると

「そのくらいにしてやれ、シー」

今度はディールが青い人に言った。

青い人はあたしに微笑んで、あたしからディールに視線を移した。あたしはあの錯覚から開放されたので、深呼吸をして、落ち着くために傍に伏せている銀に手を伸ばした。銀は目を瞑^{つむ}っていたけどあたしが触れると気遣うような視線を送ってきた。だからちよつと驚いたよ、と微笑んで銀の頭を撫でてやった。銀はそうかと返事をす

るようにゆっくり瞬いてからまた目を瞑った。

ディールのほうに姿勢を戻せば、隣に青い人が座ってこちらを見つめていたので、反射神経で目をそらす。青い人はふつとやわらかく微笑んで口を開いた。

「ああ、嫌われてしまいましたね。お嬢さん、先ほどはいきなり視てしまつてすみません」

「・・・視た？」

さっきの錯覚のことだろうか。何を視たんだろう。

「貴方が嘘をついているかいないかです」

あたしがまた聞き返そうとする前にディールが口を挟んだ。

「シー、待て。先に紹介をしよう。

アオ、こいつは俺の幼馴染のシー。本名はシーザントだ。今は俺の助手だ「私は宰相です」

・・・で、シー、こっちがアオ。

さっき俺の結界を破つて進入した敵だ「私敵じゃないです」冗談だ」

「・・・」

あたしとシーザントはしばらく無言だった。

ディールは何が面白いのか、にこにこしている。あたしは無言でディールを睨んだが効果は無かった。

その後シーザントは水の都出身で、占いなどの術を使うのに長けており、そのため道具を使わずとも相手を占ったり見極めることができるということを本人の口から聞いた。

あたしとシーザントはお互い軽く会釈して、話に戻った。

「・・・よしアオ。お前しばらくここに居ろ」

「・・・え？ここに？」

ディールのいきなりの提案に聞き返す。

「ああ。お前の気はとても珍しいだろう。他に存在するものがあるかないか。
だから俺はしばらくここで様子を見たい。いいな」

「・・・わかりました」

この声には何故か逆らえなかった。
あたしとシーザントの声がはもった。ディールは満足そうに口角を上げる。

「シー、彼女に部屋を。あと神殿のほう、それにこれと同じ気があるか調査ね」

ディールが言うと隣に座っていたシーザントの微笑がふっと黒くなったように見えた。

「・・・わかりました。部屋はすぐ用意します。ディール、この

仕事頼みますね？

今日中に終わらせてください」

彼は執務机の仕事に目配せし、次いであたしに微笑んだ後、仕事の山を振り返って固まっているディールの隙について消えた。転移魔法っぽい。

「・・・あれを今日中？シーの奴、狙ってやがったな・・・」

ディールはしてやられた、という顔で溜め息を吐くと、ソファから立って執務机に向かい、あたしに「そこで待っている」と言うとき、黙って仕事に取り掛かり始めた。

あたしはディールの邪魔をしないようにそっと立ち上がって銀の傍に行き彼の首元に顔を埋めた。

そのまま首に抱きついてもたれかかる。銀は嫌がらず、ゆっくり瞬いてアイコンタクトをしてきたのであたしも合わせてアイコンタクトした。何度もしているうちに心が安らいで、眠気が襲ってくる。

「・・・」銀・・・空、あたしどうなっちゃうの？」

うつらうつらしながら、あたしの意識は沈んでいった。

話が進まない（後書き）

タイトルどおり・・・話が進まないー；（）

9 話

コツ、コツ、コツ、コツ

心地よく揺れながら耳に入る足音。布がこすれる音。

……。おそろおそろ目をひらくと

「おや、起きてしまいましたか」

あたしの上から残念そうな声が降ってきた。・・・降って、きた？

そして自分の体勢に気づく。ディールの執務室で銀に抱きつき寝ていたはずが

いつの間にかあたしはシーザントに抱えられ運ばれていた。

「・・・オハヨウゴザイマス」

「おはようございます」

窓から月明かりが入ってきているのに動揺で出てきた目覚めの挨拶にも丁寧に戻してくれるシーザント。でもおろされる気配がない。

「遅くなってすみません。今から部屋へ案内しますよ」

シーザントはあたしを抱えたまま進んでいく。誰にもすれ違わないが恥ずかしいことこの上ない。

銀はシーザントの後ろから大人しく着いて来ていた。

「シーザント、さん、ありがとう・・・あたし自分で歩けます」

「シーザントでいいですよアオ」

「・・・はい」

シーザントは立ち止まりそつとあたしを下ろしてくれた。その時のしぐさが窓からの月明かりに照らされてとても綺麗だった。

月に照らされる青って綺麗・・・ 歩く後姿は絵になると思う。

彼の後姿をじつと見つめていると

「アオ？起きてますか？行きますよ」

ふつと振り返って微笑むシーザント。 浮世離れしてるよシーザント。 綺麗すぎる。

でも言うのは少し気が引けたので、 はいと答えて先を歩くシーザントの後を追った。

「ここです」

「お・・・」

そう言って連れてこられたのは、 天井が高めの部屋。 ちょっとシヨールームにきたような気分だ。

ベットにソファや洗面台と、一通りの生活様式が整っている。

「こちらから用があれば私が呼びに来ます。それまでこの部屋で過ごしてください。」

食事は部屋に転送します。それを食べてください。アオから用があれば中の鏡で私に連絡を。

鏡に立って名前を呼んでください。あと、部屋からの外出は禁止します。

さて、質問はありますか？」

・・・いやいやいや。ちょっと待て。つまりそれって軽く

「監禁・・・」

「そうともいえませんが部屋がいいでしょう？実際の監禁部屋はもっと色々すごいですよ。」

何なら見に行きますか？今から」

「・・・っ」

さらりと笑顔で言い切った宰相。黒い。黒いよシーザント。あたしの背筋はびしっと伸びた。

「ありませんね？では今日はこの辺りで失礼します。疲れてらっしゃるでしょう。」

ゆっくり休んでくださいね」

やわらかく、けどどこか黒く微笑んで宰相は部屋を出て行った。

銀は視線だけでシーザントを見送っていた。彼はすでに部屋のソ

ファの傍に伏せ、しつぽをぱた、ぱた、と揺らしている。そのまま目を瞑り、寝る体勢に入っていた。

銀を見ているとなんだか考えるのも面倒くさい気がしてきた。

「・・・あたしも寝よ」

あたしはベットに行かず、銀の首元に抱きつく。

伝わるぬくもりを感じていると、だんだん意識も薄れていった。

9 話（後書き）

すみません。話が進まないなのでサブタイトルがつきません（涙）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0686z/>

世界って広いんだね

2011年12月26日22時01分発行